

Title	プレイスタイルからみたテニスプレイヤーの注意の集中
Sub Title	Attentional focus of tennis players from the point of view of play style
Author	田中, 伸明(Tanaka, Nobuaki)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1998
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.37, No.1 (1998. 1) ,p.11- 19
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study was to examine the difference of attentional focus of tennis players by play styles. The subjects were 277 tennis players(181 males, 96 females) of university athletic students. They were investigated with T-TAIS(Tennis-Test of Attentional and Interpersonal Style), and assigned to one of three play styles, Baseline Player, Net Player and Allaround Player. Statistical analyses of data of three play styles yielded the following findings: Males; Net Players and Allaround Players were good style of attentional focus. But Baseline Players were not good style of attentional focus, and it is because there "Reduced attentional focus" was high and there "Broad external attentional focus" was low. Females; Net Players and Allaround Players were good style of attentional focus. But Baseline Players were not good style of attentional focus, and it is because there "Broad internal attentional focus" was low.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00370001-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プレイスタイルからみたテニスプレイヤーの注意の集中

田 中 伸 明*

Attetional Focus of Tennis Players from the point of view of Play Styles

by Nobuaki Tanaka¹

Abstract

The purpose of this study was to examine the difference of attentional focus of tennis players by play styles.

The subjects were 277 tennis players(181 males,96 femails) of university athletic students.They were investigated with T-TAIS(Tennis-Test of Attentional and Interpersonal Style),and assigned to one of three play styles, Baseline Player, Net Player and Allaround Player. Statstical analyses of data of three play styles yielded the following findings:

Males; Net Players and Allaround Players were good style of attentional focus. But Baseline Players were not good style of attentional focus,and it is because there "Reduced attentional focus" was high and there "Broad external attentional focus" was low.

Females; Net Players and Allaround Players were good style of attentional focus. But Baseline Players were not good style of attentional focus,and it is because there "Broad internal attentional focus" was low.

Key words ; attentional focus,tennis,play style,T-TAIS

緒 言

Weinberg²⁾ は、選手とコーチに対しテニスのメンタルな側面とフィジカルな側面の重要性を比較させた結果、テニスの成功(実力を発揮すること)は、80～90%がメンタル面だと答えたといっている。それは、テニスにメンタルな面から見て、とても難しいスポーツであると説明している。そのうえで、テニスの勝敗が、多くの場合大切な場面での集中力の喪失によって決定されるとしている。この集中力については、適切な手がかりに注意を向ける能力、および、試合中その注意集中を持続する能力としている。つまり、相手、ボール、風、太陽、気温、騒音、観衆、思考などといった刺激に対して、どの刺激に対して注意を向け、その刺激をどのように処理していくかということである。

この集中力について、Nideffer³⁾ は、方向性(内-外)と注意の幅(広-狭)の2次元から説明している。すなわち、自己の内部(感情等)か外部環境(相手、風等)のどちらに注意を向けるか、注意の範囲をどの範囲に絞るかということである。このような考えのもとにNideffer³⁾ は、集中力を測定する質問紙 TAIS (Test of Attentional and Interpersonal Style) を作成した。この TAIS は、中島ら⁴⁾ によって翻訳されたが、日常生活場面に関わる質問項目であることから、種目内の検討を行うには、各種目の競技場面を考慮した TAIS のほうが有効であるとされ、それぞれの種目の TAIS が作成された^{5) 6) 7)}。テニスでは、注意様式に関わる6尺度を取り上げ、軟式庭球の場面を中心に、スポーツ場面に関わる52からなる質問項目に修正され、山本ら⁸⁾ によって軟式庭球版 TAIS が作成された。そしてさらに、硬式テ

*慶應義塾大学体育研究所助手

¹Assistant of the Instiute of Physical Education, Keio University.

ニスにも使用できるように修正され、52の質問項目からなる T-TAIS (Tennis-Test of Attentional and Interpersonal Style) が杉原ら⁹⁾ によって作成された。この T-TAIS の尺度は、表1に示した6尺度である。

表1 T-TAIS 尺度

BET : 広い外的な注意 Broad external attentional focus	同時に多くの様々な外的な刺激を統合する能力 正確で素早い状況判断などに必要とされる
OET : 外的な刺激による過剰負荷 Overloaded by external stimuli	外的な刺激による注意の妨害されやすさ 周囲の状況によって注意が散漫になる傾向
BIT : 広い内的な注意 Broad internal attentional focus	様々な考えや情報を統合する能力 自分の思考を系統立てたり分析したりするときが必要とされる能力
OIT : 内的な刺激による過剰負荷 Overloaded by internal stimuli	内的な思考による注意の妨害のされやすさ 一度に多くのことを考えすぎて混乱する傾向
NAR : 狭い注意の集中 Narrow attentional focus	必要に応じて注意の幅を狭くすることができる能力
RED : 狭すぎる注意の集中 Reduced attentional focus	一つの刺激や思考に固執するなど注意を狭くしすぎて失敗する傾向

この T-TAIS を使用したテニスプレイヤーの注意の集中についての分析は、杉原ら⁹⁾ と田中ら¹⁰⁾ の競技レベルでの比較を行ったものだけのようであるが、テニスプレイヤーの集中力を考える場合、競技レベルでの比較をするだけでは不十分であるといえる。テニスプレイヤーには、得意とするショットを個々が持ち、グランドストロークを中心にプレイするベースラインプレイヤー (以下BPと略記する)、ボレーを中心にプレイするネットプレイヤー (以下NPと略記する)、グランドストロークからボレーまでそつなくプレイするオールラウンドプレイヤー (以下APと略記する) といった3つのプレイスタイルがある。プレイスタイルによって、プレイするテンポや、攻め方などが違うように、当然集中力のスタイルにも違いがあるのではないかと考えられる。しかしながら、プレイスタイルによる集中力の検討は行われてはいない。そこで、本研究では、テニスプレイヤーのプレイスタイルにおける注意の集中の違いを検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象

関東大学テニス連盟に所属する大学テニス部員、男子212名、女子116名であった。有効回答は、男子181名、女子96名であった。

2. 調査期間及び調査方法

1996年10月～12月に郵送調査にて行った。

3. 調査手順

杉原ら⁹⁾ の作成した T-TAIS を使用した。質問項目に対し、「まったくない」、「めったにない」、「ときどきある」、「ひんぱんにある」、「つねにある」の5段階評定とし、一つを選ぶ回答形式とした。また、プレイスタイルについての質問項目「ベースラインプレイヤー」、「ネットプレイヤー」、「オールラウンドプレイヤー」の3種を付け加えた。

4. 結果の処理

「まったくない」から「つねにある」まで0, 1, 2, 3, 4点として得点化し、各尺度別に得点を集計し、さらにプレイスタイル別に集計した。そして、プレイスタイルによって、注意の集中に違いが見られるかを検討するために、各尺度毎に、1要因（プレイスタイル）の分散分析を行った。さらに、有意差のあった尺度について、下位検定（多重比較）を行った。

結果及び考察

表2 プレイスタイル毎の人数及び割合

	男子		女子	
	N	%	N	%
ベースラインプレイヤー	82	45.3	70	72.9
ネットプレイヤー	26	14.4	5	5.2
オールラウンドプレイヤー	73	40.3	21	21.9

表2は、男女それぞれのプレイスタイルの割合を表したものである。その結果、男子では、BPは45.3%、APは40.3%、NPは14.4%であった。女子では、BPは72.9%、APは21.9%、NPは5.2%であった。これらの結果より、ネットプレイを主体とするプレイヤーは少ないということがわかる。これは、ボレーの得手不得手という問題も考えられるが、日本のテニスコート事情、つまり、ネットプレイヤーに不利な球足の遅いクレークコートやオムニコートが多いことが一つの原因であるともいえるであろう。しかし、NPとAPは、ネットプレイを取り入れてゲームを組み立てているといえる。そのように考えると、男子の場合、約55%、半分のプレイヤーがネットプレイを行っているが、女子の場合、30%弱であり、1/3のプレイヤーしかネットプレイを行わない、言い換えるならば、2/3のプレイヤーがベースラインプレイであるということがいえる。したがって、男女の特徴として、男子選手は、ネットプレイを行う選手と、ベースラインプレイを行う選手が同じ割合であるが、女子選手は、ベースラインプレイを主体とする選手が多いということである。

表3-1 男子におけるプレイスタイル別各尺度平均点

プレイスタイル	N		BET	OET	BIT	OIT	NAR	RED
ベースライン	82	M	11.8	18.1	16.8	14.7	26.1	26.3
		SD	3.94	6.38	5.13	5.37	5.21	5.72
ネット	26	M	13.9	15.9	18.7	13.7	25.0	24.7
		SD	4.02	6.46	4.87	5.32	4.60	5.57
オールラウンド	73	M	13.2	16.7	17.9	13.8	25.4	23.9
		SD	4.38	5.30	5.73	4.49	5.31	4.76

表3-2 女子におけるプレイスタイル別各尺度平均点

プレイスタイル	N		BET	OET	BIT	OIT	NAR	RED
ベースライン	70	M	10.9	19.2	15.2	15.5	25.6	26.2
		SD	3.60	6.32	4.24	5.68	4.98	6.78
ネット	5	M	12.6	17.6	17.4	15.8	25.8	26.0
		SD	1.82	4.28	2.88	2.86	2.59	2.74
オールラウンド	21	M	12.2	18.4	17.8	14.7	26.5	26.0
		SD	3.37	3.85	3.63	3.39	4.33	3.89

表4-1 男子におけるプレイスタイル別各尺度T得点

プレイスタイル	N	BET	OET	BIT	OIT	NAR	RED
ベースライン	82	49.0	50.4	49.8	49.6	53.2	52.1
ネット	26	54.9	46.5	53.9	47.4	51.0	49.2
オールラウンド	73	52.9	48.0	52.3	47.4	51.8	47.9

表4-2 女子におけるプレイスタイル別各尺度T得点

プレイスタイル	N	BET	OET	BIT	OIT	NAR	RED
ベースライン	70	49.2	49.9	48.4	49.2	50.1	49.6
ネット	5	54.0	46.7	53.2	49.9	50.4	49.2
オールラウンド	21	53.0	48.3	54.2	47.5	51.9	49.2

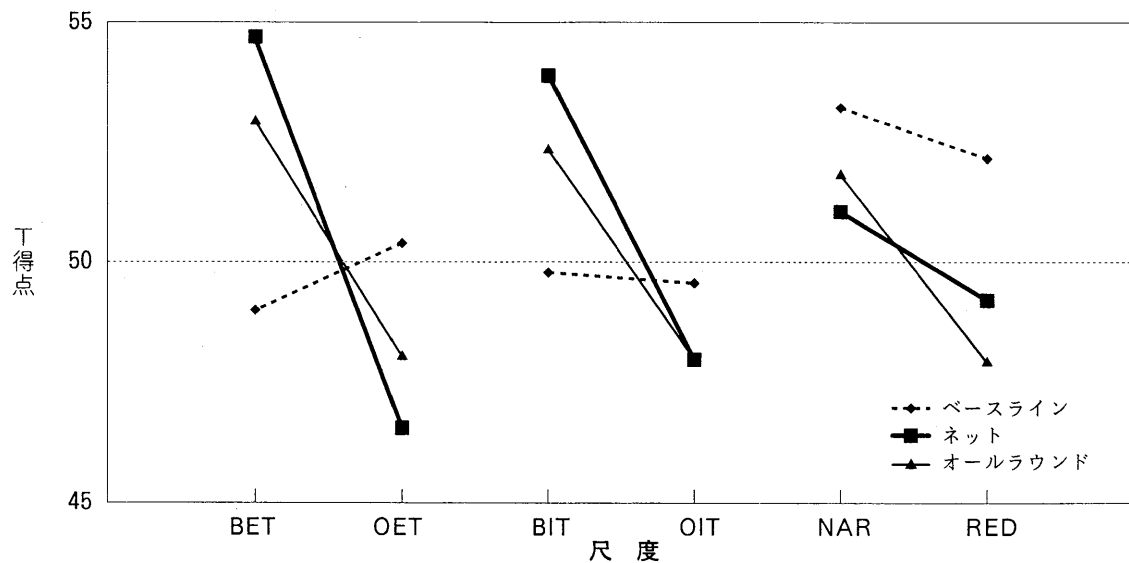


図1-1 男子におけるプレイスタイル別T得点

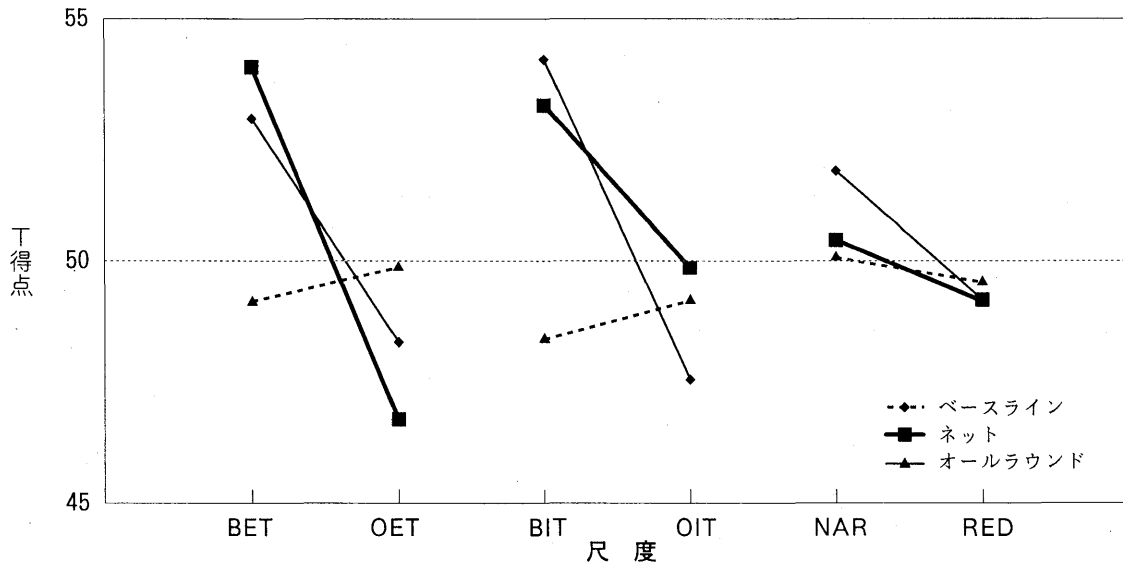


図1-2 女子におけるプレイスタイル別T得点

表3-1, 表3-2は, 男女それぞれにプレイスタイル別に各尺度毎に集計したものである。これは, 田中ら⁶⁾がテニスプレイヤーの注意の集中を捉える場合, 男女それぞれに検討する必要があると報告したのに基づくものである。表4-1, 表4-2は, 表3-1, 表3-2の得点を田中ら⁶⁾の報告をもとにT得点化したものである。さらに, 表4-1, 表4-2をグラフにしたものが図1-1, 図1-2である。男子では, NPとAPにおいてはほぼ同じ波形を示しているが, BPは, これらのプレイスタイルとは異なった波形を示している。グラフから, NPとAPは, $BET > OET$, $BIT > OIT$, $NAR > RED$ という望ましい集中力のスタイルをしているが, BPは, $BET < OET$ や $BIT \neq OIT$ といあまり望ましいとはいえない集中力のスタイルをしていることがわかる。女子においても男子同様, NPとAPでほぼ同じ波形を示しているが, BPは, これらのプレイスタイルとは異なった波形を示している。グラフから, NPとAPは望ましい集中力のスタイルをしているが, BPは, 外的, 内的刺激を統合する能力よりも妨害される方が高いという望ましいとはいえない集中力のスタイルをしていることがわかる。

表5-1 男子分散分析表 (BET)

	df	Mean Square	F
Between	2	65.09	3.810 *
With In	178	17.08	

* $p < .05$

表5-2 男子分散分析表 (OET)

	df	Mean Square	F
Between	2	60.13	1.682
With In	178	35.75	

表5-3 男子分散分析表 (BIT)

	df	Mean Square	F
Between	2	46.05	1.613
With In	178	28.56	

表5-4 男子分散分析表 (OIT)

	df	Mean Square	F
Between	2	20.67	0.818
With In	178	25.27	

表5-5 男子分散分析表 (NAR)

	df	Mean Square	F
Between	2	17.35	0.650
With In	178	26.72	

表5-2 男子分散分析表 (RED)

	df	Mean Square	F
Between	2	113.15	3.984 *
With In	178	28.40	

* p < .05

表6-1 多重比較結果 (BET)

プレイスタイル	M±SD	ベースライン	ネット	オールラウンド
ベースライン	11.8±3.94		*	*
ネット	13.9±4.02			ns
オールラウンド	13.2±4.38			

* p < .05

表6-2 多重比較結果 (RED)

プレイスタイル	M±SD	ベースライン	ネット	オールラウンド
ベースライン	26.3±5.72		ns	**
ネット	24.7±5.57			ns
オールラウンド	23.9±4.76			

** p < .01

表5-1～表5-6は、男子の各尺度毎の分散分析表である。その結果、BET (F=3.810, p < .05), RED (F=3.984, p < .05)において有意差が見られた。したがって、BET, REDについて下位検定を行った。表6-1, 表6-2はその結果である。BETにおいて、BPはNP, APと比較すると有意に得点が低く、REDにおいては、BPは、APと比較すると有意に得点が高いことが明らかになった。これらは、RED「一つの刺激や思考に固執するなど注意を狭くしすぎて失敗する傾向」が高く、注意を広く切り換えるという能力が低いということを示している。これは、図1-1からBET, BITという広い注意の尺度が他のプレイスタイルよりも低いということからもいえることである。その注意を広く切り換えるという能力のなかでもとくに、外的な尺度BET「同時に多くの様々な外的な刺激を統合する能力」が低いということである。BPのBETが低いのは、NPやAPが、自ら攻撃を仕掛けるプレイスタイルであり、相手の弱点や特徴などを分析して攻撃を仕掛ける必要があるのに対し、BPが、すべてとはいえないが、どちらかという受身のプレイスタイルであり、相手の攻撃に対して、どうように対応するかといったために、NPやAPよりは、相手を分析する能力があまり必要ではないためではないだろうか。

表7-1 女子分散分析表 (BET)

	df	Mean Square	F
Between	2	18.67	1.528
With In	93	12.22	

表7-2 女子分散分析表 (OET)

	df	Mean Square	F
Between	2	10.37	0.308
With In	93	33.67	

表7-3 女子分散分析表 (BIT)

	df	Mean Square	F
Between	2	59.01	3.565 *
With In	93	16.55	

表7-4 女子分散分析表 (OIT)

	df	Mean Square	F
Between	2	5.38	0.201
With In	93	26.74	

* p < .05

表7-5 女子分散分析表 (NAR)

	df	Mean Square	F
Between	2	5.61	0.247
With In	93	22.71	

表7-2 女子分散分析表 (RED)

	df	Mean Square	F
Between	2	0.28	0.007
With In	93	37.63	

表8 多重比較結果 (BIT)

プレイスタイル	M ± SD	ベースライン	ネット	オールラウンド
ベースライン	15.2±4.24		ns	*
ネット	17.4±2.88			ns
オールラウンド	17.8±3.63			

* p < .05

表7-1～表7-6は、女子の各尺度毎の分散分析表である。その結果、BIT (F=3.565, p<.05) において有意差が見られた。したがって、BITについて下位検定を行った。表8はその結果である。BITにおいて、BPは、APと比較すると有意に得点が低いことが明らかになった。これは、BIT「様々な考えや情報を統合する能力」が低いということである。これは、図1-2において、注意を狭くする尺度NAR、REDでは違いはないが、注意を広くする尺度が他のプレイスタイルよりも低いということからいえることである。その中でもとくに、内的な尺度BITが低いということである。このBPのBITが低いのは、APが、これまでの試合の流れや、相手の特徴、自分の調子を考慮して、攻撃を仕掛けていくのに対し、BPが、どちらかというと、受身のプレイスタイルであり、ストロークをするという意識のもとにプレイをしているために、自分の思考を系統立てて分析したりすることができないのではないだろうか。しかしながら、NPのn数が少ないことから、APとBPの比較になってしまい、3つのプレイスタイルを比較できたとはいえない。NPの割合は極端に少ないが、NPのデータを集めることが必要になってくるであろう。

以上のことから、男子、女子共に、NPとAPは、望ましい集中力のスタイルをしているが、BPは、男子では、「一つの刺激や思考に固執するなど注意を狭くしすぎて失敗する傾向」が高く、注意を広く切り換えるという能力、とくに「同時に多くの様々な刺激を統合する能力」が低いというあまり望ましくはない集中力のスタイルであった。女子では、外的、内的な刺激によって妨害されやすく、「様々な考えや情報を統合する能力」が低いというあまり望ましくない集中力のスタイルであった。

ま と め

本研究は、テニスプレイヤーのプレイスタイルにおける注意の集中の違いを検討することを目的とした。

調査対象は、関東大学テニス連盟に所属する大学テニス部員男子212名、女子116名であった。(有効回答は、男子181名、女子96名であった。)調査期間は1996年10月～12月で、郵送調査にて行った。T-TAIS (Tennis-Test of Attentional and Interpersonal Style) を使用し集中力のスタイルを測定し、3つのプレイスタイル(ベースラインプレイヤー、ネットプレイヤー、オールラウンドプレイヤー)に群分けした。そして、1要因(プレイスタイル)の分散分析を行い、有意差のあった尺度について下位検定を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 男子では、ネットプレイヤーとオールラウンドプレイヤーは、望ましい集中力のスタイルをしているが、ベースラインプレイヤーは、「一つの刺激や思考に固執するなど注意を狭くしすぎて失敗する傾向」が高く、注意を広く切り換えるという能力、とくに「同時に多くの様々な刺激を統合する能力」が低いというあまり望ましくはない集中力のスタイルであった。
2. 女子では、ネットプレイヤーとオールラウンドプレイヤーは、望ましい集中力のスタイルをしているが、ベースラインプレイヤーは、外的、内的な刺激によって妨害されやすく、「様々な考えや情報を統合する能力」が低いというあまり望ましくない集中力のスタイルであった。

《参考文献》

- 1) 遠藤俊郎：集中力から見たバレーボール選手の心理的適性に関する研究—注意様式の因子構造について—, 山梨大学教育学部研究報告, 42, 144-155, 1991
- 2) 中島宣行・太田鐵男・藤田明男：スポーツ選手の集中力について—サッカー, バレーボール, 長距離選手の特性—, 日本体育学会第34回大会号, 198, 1983
- 3) Nideffer, R.M. : Test of Attentional and Interpersonal Style, Journal of Personality and Social Psychology, 34, 3, 394-404, 1976
- 4) 杉原 隆・占田伊津美：テニスプレイヤーの注意様式と技能水準—日常場面との関係, および因子構造の検討—, スポーツ心理学研究, 16, 1, 20-27, 1989
- 5) 高橋さと・山本勝昭：バドミントン選手の技能水準からみた注意様式について—バドミントン場面の注意様式テスト作成, 及び注意トレーニングの効果—, 第8回九州スポーツ心理学学会抄録, 8, 1, 48-49, 1995
- 6) 山中伸明・近藤明彦・水野忠和・中島宣行：テニスプレイヤーの注意の集中に関する一考察, 日本体育学会とうきょう支部会報第24回大会発表要旨, 1996.NO.3, 6, 1997
- 7) Weinberg, R.S. : The Mental Advantage. -Developing Your Psychological Skills in Tennis-, Leisure Press, 1988, 1-9, 57-72

プレイスタイルからみたテニスプレイヤーの注意の集中

- 8) 山本裕二・井篁 敬・清水 諭・工藤敏己：集中力測定の試み—軟式庭球版 TAIS について—，日本体育協会スポーツ科学研究報告集，昭和 60 年度日本体育協会医科学研究報告No. II 競技種目別競技力向上に関する研究第 9 報，125-131，1986